

を證せんとするに至れり、『選擇集』の宗義上に於ける位置
以て知るべし。

選擇本願

(一) 選擇本願 題して選擇本願念佛集と云へば、この書
一部の明かす所、選擇本願の念佛に在るや明かなり。始
めに『安樂集』によりて聖淨二門を判して、聖道門を闡きて
選んで淨土門に入るべきことを示し、次に『散善義』により
て淨土門中の諸の雜行を抛げすて、選んで正行に歸す
べきことを示し、而して後選擇本願の由來を釋顯して唯
念佛の一行のみ正定業たる所以を明かされたり。選擇
本願とは阿彌陀如來の因中に在し、とき、衆生往生の行
業を定め給ふに、諸種の行業を選捨し、唯念佛の一行のみ
を取り、往生の本願を立てられたるを云ふなり。何故に
かく諸行を捨て、念佛を取られしや、これに二由あり勝

劣と難易となり。勝劣とは名號には佛果の萬德を攝し
て盡さざる無く、諸行の如きは各其の一に止まるが故に、
諸行は劣にして念佛は勝なり。難易とは諸行を修せん
ことは頗る企て難くして一切賢愚善惡の諸機に通ぜず、
念佛は行住坐臥を簡はず、時處の如何を論せざれば、之を
修せんこと甚だ易し。かく功德最も勝れて、修行甚だ易
きを以て取りて本願の行とせられたるものなり。本願
既に此の如くなるが故に貧富貴賤通俗の別なく皆同じ
く往生の大益を被る。第十八の本願即ち是なり。『和讃』
に曰はく、

智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗を
ひらきつゝ、選擇本願のへたまふと。

然るにこの選擇本願より流出して八種の選擇を成す。

八選擇とは『大經』に三選擇あり選擇本願選擇讚歎選擇留教これなり選擇本願は前に述べたり、選擇讚歎とは三輩章の中に於て、釋尊餘行を讚嘆せずして唯念佛のみを讚嘆せられたるものを云ひ、選擇留教とは釋尊廣く餘行諸善を説くと雖唯だ念佛の一法のみを留められたるを云ふ、『觀經』に三選擇あり、選擇攝取選擇化讚、選擇付屬これなり、選擇攝取とは觀經の中、定散諸行を明かせども、彌陀の光明は唯念佛の衆生のみを攝取して捨て給はざるを云ひ、選擇化讚とは下品上生の人聞經と稱佛との二行ありと雖も、化佛の讚嘆は唯稱佛名の功德にあるを云ひ、選擇付屬とは定散諸善を説かれたれども、經末に至りては唯念佛のみを阿難に付屬せられたるを云ふなり、『阿彌陀經』に一選擇あり選擇證誠なり、諸經の中多く往生の行を

説かれたれども、諸佛は彼等には證誠せずして、唯『阿彌陀經』に説かれたる念佛往生にのみ證誠せられたるものなり。『般舟三昧經』に一の選擇あり選擇我名なり、彌陀自ら告げて我國に生れんと欲せん者は常に我名を念ずべしと曰へるこれなり。彌陀釋迦諸佛の選擇此の如くなれば念佛を以て三經の宗致とすること明かにしてまた疑ふべからず、されば衆生はこの佛意を承けて、先づ聖道門を閑きて淨土門に入り、雜行を抛げすて、正行に歸し、助業を傍にして正定業を專にせざるべからず、佛の本願に順するが故に必ず往生することを得るなり、

(二) 信爲能入 源空上人の教義は念佛往生を標榜せられしに或は誤りて稱名の行功を積みて往生の業因となすものとする人々あり、淨土門内に各種の異義を見るは

信爲能入

多くこれらに職由せり。然るに上人の教義は決して然らず。往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申してうたがひなく往生するぞと思ひ取りて申す外は子細候はず。と曰ひて、往生の得不は信心によりて定まる。と判したるものなり。『選擇集』に「生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信を以て能入とす」と曰へるもの實に此意なり。されば念佛往生とは信心定まりて念佛する人は往生すと云ふことゝろにして、高祖の信心正因と曰へると毫髮の差異あることなし。唯夫れ他力の稱名に就く。と他力の信心に就くと。の左右あるのみ。稱名に就て往生を談するは外諸行に對して廢立を論ずるものにして、自力の稱名を以て往生に回向する如きを取るに非ず。信心に就て往生を談するは、内疑惑の行者を簡はんが爲にして機受の

極要を示す者なり。故にまた『散善義』の二種深信の釋を指して「今二種の信心を建立して九品の往生を決定する者なり」と曰ひて、九品の往生は一にこの二種の信心によることを示し、念佛往生の教義は全く信心を以て涅槃の能入となすことを顯されたり。之を『正信偈』に述して

還來生死輪轉家

決以疑情爲所止

速入寂靜無爲樂

必以信心爲能入

と曰ひ、『和讃』に頌して。

諸佛方便ときいたり 源空ひじりさしゆじつゝ
無上の信心おしへてぞ 涅槃のかごをばひらきける
眞の知識にあふことは かたきがなかなほかたし
流轉輪廻のきはなきは 疑情のさわりにしくぞなき
と曰はれたるものと知るべし。

要文拔萃

南無阿彌陀佛往生之業
念佛為本

(選擇集上二)

次往生淨土門者、就此有二、一者正明往生淨土之教、二者傍明往生淨土之教、初正明往生淨土之教者、三經一論是也、三經者、一無量壽經、二觀無量壽經、三阿彌陀經也、一論者天親往生論是也、乃至次傍明往生淨土之教者、華嚴法華隨求尊勝寺、明諸往生淨土之諸經是也、又起信論寶性論十住毘婆娑論攝大乘論等、明諸往生淨土之諸論是也。

(同三)

初正行者、付之有開合二義、初開為五種、後合為二種、初開為五種者、一讀誦正行、二觀察正行、三禮拜正行、四稱名正行、五讚歎供養正行也、第一讀誦正行者、專讀誦觀經等也、

即文云一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等也、第二觀察正行者、專觀察彼國依正二報也、即文云一心專注思想觀察憶念彼國二報莊嚴是也、第三禮拜正行者、專禮彌陀也、即文云若禮即一心專禮彼佛是也、第四稱名正行者、專稱彌陀名號也、即文云若口稱即一心專稱彼佛是也、第五讚歎供養正行者、專讚歎供養彌陀也、即文云若讚歎供養即一心專讚歎供養是名正也、若開讚歎與供養而為二者、可名六種正行也、今依合義、故云五種、次合為二種者、一者正業、二者助業、初正業者、以上五種之中、第四稱名為正定之業、即文云一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者、是名正定之業、順彼佛願故是也、問曰、何故五種之中、獨以稱名念佛為正定業乎、答曰、順彼佛願故、意云、稱名念佛是彼佛本願行也、故修之者、乘彼佛願、必得往生。

也其本願義至下可知次雜行者即文云除此正助二行已外自餘諸善悉名雜行是也意云雜行無量不遑具述但今且翻對五種正行以明五種雜行也一讀誦雜行二觀察雜行三禮拜雜行四稱名雜行五讚歎供養雜行也第一讀誦雜行者除上觀經等往生淨土經已外於大小乘顯密諸經受持讀誦悉名讀誦雜行第二觀察雜行者除上極樂依正已外大小顯密事理觀行皆悉名觀察雜行第三禮拜雜行者除上禮拜彌陀已外於一切諸餘佛菩薩等及諸世天等禮拜恭敬悉名禮拜雜行第四稱名雜行者除上稱彌陀名號已外稱自餘一切佛菩薩等及諸世天等名號悉名稱名雜行第五讚歎供養雜行者除上彌陀佛已外於一切諸餘佛菩薩等及諸世天等讚歎供養悉名讚歎供養雜行此外亦有布施持戒等無量之行皆可攝盡雜行言

〔選擇集上七以下〕

次判二行得失者若修前正助二行心常親近憶念不斷名為無間也若行後雜行即心常間斷雖可回向得生衆名疎雜之行即其文也案此文意就正雜二行有五番相對一親疎對二近遠對三有間無間對四回向不回向對五純雜對也第一親疎對者先親者修正助二行者於阿彌陀佛以為親昵故疏上文云衆生起行口常稱佛佛即聞之身常禮敬佛佛即見之心常念佛佛即知之衆生憶念佛者佛亦憶念衆生彼此三業不相捨離故名親緣也次疎者雜行也衆生口不稱佛佛即不聞之身不禮佛佛即不見之心不念佛佛即不知之衆生不憶念佛者佛不憶念衆生彼此三業常相捨離故名疎行也第二近遠對者先近者修正助二行者於阿彌陀佛甚為隣近故疏上文云衆生願見佛佛即應念現

在目前故名近緣也。次遠者雜行也。衆生不願見佛，佛即不應念不現。目前故名遠也。但親近義是雖似一，善導之意分而爲二，其旨見疏文故。今所引釋也。第三無間有間對者，先無間者，修正助二行者，於阿彌陀佛，憶念不間斷故。云名爲無間是也。次有間者，修雜行者，於阿彌陀佛，憶念常間斷故。云心常間斷是也。第四不回向回向對者，修正助二行者，縱令別不用回向自然成往生業，故疏上文云。今此觀經中十聲稱佛，即有十願十行具足。云何具足，言南無者即是歸命，亦是發願回向之義。言阿彌陀佛者，即是其行。以斯義故，必得往生。上_巳次回向者，修雜行者，必用回向之時，成往生之因。若不用回向之時，不成往生之因，故云雖可迴向得生是也。第五純雜對者，先純者，修正助二行者，純是極樂之行也。次雜者，是純非極樂之行，通於人天及以三乘，亦通於十方淨

土故云雜也。然者西方行者須捨雜行修正行也。

(同上九以下)

問曰：普約請願，選捨麤惡，選取善妙，其理可然。何故第十八願選捨一切諸行，唯偏選取念佛一行爲往生本願乎？答曰：聖意難測，不能輒解。雖然今試以二義解之。一者勝劣義。二難易義。初勝劣者，念佛是勝，餘行是劣。所以者何？名號者是萬德之所歸也。然則彌陀一佛所有四智三身十力四無畏等一切內證功德，相好光明說法利生等一切外用功德，皆悉攝在阿彌陀佛名號之中。故名號功德最爲勝也。餘行不然。各守一隅，是以爲劣也。譬如世間屋舍名字之中，攝棟梁椽柱等一切家具，棟梁等一名字中不能攝一切。以之應知。然則佛名號功德勝一切功德故，捨劣取勝，以爲本願。歟。次難易義者，念佛易修，諸行難修。是故往生禮讚云：問曰何

故不令作觀、直遣專稱名字者有何意也、答曰、乃由衆生障重境細心羸識、颺神飛觀難成就也、是以大聖悲憐、直勸專稱名字、正由稱名易故、相續即生、乃至故知念佛易故、通於一切、諸行難故、不通諸機、然則爲令一切衆生平等往生、捨難取易爲本願歟、乃至然則彌陀如來法藏比丘之昔、被催平等慈悲、普爲攝於一切、不以造像起塔等諸行爲往生本願、唯以稱名念佛一行爲其本願也。
(同十七以下)

凡四十八願莊嚴淨土、華池寶閣、無非願力、何於其中獨可疑惑念佛往生願乎、加之、一一願終云若不爾者、不取正覺、而阿彌陀佛成佛已來於今十劫、成佛之誓、既以成就、當知一一之願不可虛設。
(同上二十)

問曰、經云十念、釋云十聲、念聲之義如何、答曰、念聲是一、何以得知、觀經下品下生云、令聲不絕、具足十念、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪、今依此文、聲即是念念、則是聲、其意明矣。
(同二十)

問曰、經云乃至、釋云下至、其意如何、答曰、乃至與下至、其意是一、經云乃至者、從多向少之言也、多者上盡一形也、少者下至十聲一聲等也、釋云下至者、下者對上之言也、下者下至十聲一聲等也、上者上盡一形也、乃至今此願乃至者、即是下至也、是故今善導所引釋、下至之言、其意不相違、但善導與語師其意不同、諸師之釋、別云十念往生之願、善導獨總云念佛往生願、諸師別云十念往生願者、其意即不周也、所以然者、上捨一形、下捨一念之故也、善導總言念佛往生願者、其意即周也、所以然者、上取一形、下取一念之故也。
(同上廿一)

斯有三意、一爲廢諸行歸於念佛而說諸行也、二爲助成念

佛而說諸行也。三約念佛諸行二門各為立三品而說諸行也。一為廢諸行歸於念佛而說諸行者。準善尊觀經疏中云。上來雖說定散兩門之益。望佛本願。意在衆生一向專稱彌陀佛名之釋意。且解之者。上輩之中雖說菩提心等餘行。望上本願。意唯在衆生專稱彌陀名。而本願之中更無餘行。三輩共依上本願。故云一向專念無量壽佛也。一向者對二向三向等之言也。例如彼五竺有三種之寺。一者一向大乘寺。此寺之中無學小乘。二者一向小乘寺。此寺之中無學大乘。三者大小兼行寺。此寺之中大小兼學。故云兼行寺。當知大小兩寺。有一向言。兼行之寺。無一向言。今此經中。一向亦然。若念佛外亦加餘行。即非一向。若準寺者可云兼行。既云一向。不兼餘明矣。既先雖說餘行。後云一向專念。明知廢諸行。唯用念佛。故云一向。若不然者。一向之言。最以叵消歟。二為

助成念佛說。此諸行者。此亦有二意。一以同類善根助成念佛。二以異類善根助成念佛。初同類助成者。善導和尚觀經疏中。舉五種助成念佛一行是也。具如上正雜二行之中說。次異類助成者。先就上輩而論。正助者。一向專念無量壽佛者。是正行也。亦是所助也。捨家棄欲而作沙門。發菩提心等者。是助行也。亦是能助也。謂往生之業。念佛為本。故為一向。修念佛。捨家棄欲。而作沙門。又發菩提心等也。就中出家發心等者。且指初出。及以初發念佛。是長時不退之行。寧容妨礙念佛助也。中輩之中。亦有起立塔像。懸繒燃燈。散華燒香等諸行。是則念佛成也。其旨見往生要集。謂助念方法中。方處供具等是也。下輩之中。亦有發心。亦有念佛。助正之義。準前可知。三約念佛諸行各為立三品。而說諸行者。先約念佛立三品者。謂此三輩中。通皆云一向專念無量壽佛。是則

約念佛門立其三品也。故往生要集念佛證據門云：雙卷經三輩之業雖有淺深，然通皆云一向專念無量壽佛。或師次約諸行門立三品者，謂此三輩中通皆有菩提心等諸行，是則約諸行立其三品也。故往生要集諸行往生門云：雙卷經三輩亦不出此。已凡如此三義雖有不同，共是所以爲一向念佛也。初義即是爲廢立而說，謂諸行爲廢而說念佛爲立而說；次義即是爲助正而說，謂爲助念佛之正業而說諸行之助業；後義即是爲傍正而說，謂雖說念佛諸行二門以念佛而爲正，以諸行而爲傍，故云三輩通皆念佛也。但此等三義最難知，請諸學者取捨在心。今若依善導以初爲正耳。

（同廿五）

此大利者是對小利之言也。然則以菩提心等諸行而爲小利，以乃至一念而爲大利也。又無上功德者是對有上之言

也。以餘行而爲有上，以念佛而爲無上也。既以一念爲一無上，當知以十念爲十無上，又以百念爲百無上，又以千念爲千無上。如是展轉從少至多，念佛恒沙無上功德應恒沙如是應知。然則諸願求往生之人，何廢無上大利念佛，強修有上小利餘行乎？

（同上廿八）

次深心者，謂深信之心。當知生死之家，以疑爲所止，涅槃之城，以信爲能入。故今建立二種信心，決定九品往生者也。

（同四十四）

加之，下品下生是五逆重罪之人也，而能除滅逆罪，所不堪餘行，唯有念佛之力，能堪滅於重罪，故爲極惡最下之人，而說極善最上之法。例如彼無明淵源之病，非中道府藏之藥，即不能治。今此五逆重病淵源，亦此念佛靈藥府藏，非此藥者，何治此病？

（同下六）

問曰、若爾者、何故直不說本願念佛行、煩說非本願定散諸善乎、答曰、本願念佛行、雙卷經中委既說之、故重不說耳、又說定散爲顯念佛超過餘善、若無定散、何顯念佛特秀、例如法華秀三說上、若無三說、何顯法華第一、故今定散爲廢而說念佛三昧爲立而說。

(同下十六)

當知隨他之前、慳雖開定散門、隨自之後、還閉定散門、一開以後、永不閉者、唯是念佛一門、彌陀本願、釋尊付屬意在斯矣。

(同下十八)

凡案三經意、諸行之中、選擇念佛以爲旨歸、先雙卷經中有三選擇、一選擇本願、二選擇讚歎、三選擇留教、一選擇本願者、念佛是法藏比丘於二百一十億之中、所選擇往生之行也、細旨見上、故云選擇本願也、二選擇讚歎者、上三輩中雖舉菩提心等餘行、釋迦即不讚嘆餘行、唯於念佛而讚歎云

當知一念無上功德、故云選擇讚歎也、三選擇留教者、又上雖舉餘行諸善、釋迦選擇唯留念佛一法、故云選擇留教也、次觀經中、又有三選擇、一選擇攝取、二選擇化讚、三選擇付屬、一選擇攝取者、觀經之中、雖明定散諸行、彌陀光明唯照念佛衆生攝取不捨、故云選擇攝取也、二選擇化讚者、下品上生人、雖有聞經稱佛二行、彌陀化佛選擇念佛、云汝稱佛名、故諸罪消滅、我來迎汝、故云選擇化讚也、三選擇付屬者、又雖明定散諸行、唯獨付屬念佛一行、故云選擇付屬也、次阿彌陀經中、有一選擇、所謂選擇證誠也、已於諸經中多雖說往生之諸行、六方諸佛於彼諸行而不證誠、至此經中說念佛往生、六方恒沙諸佛、各舒舌覆大千、說誠實語、而證誠之、故云選擇證誠也、加之般舟三昧經中、又有一選擇、所謂選擇我名也、彌陀自說言、欲來生我國者、常念我名、莫令休

息故云選擇我名也、本願攝取我名化讚此之四者、是彌陀選擇也、讚歎留教付屬、斯之三者是釋迦選擇也、證誠者六方恒沙諸佛之選擇也、然則釋迦彌陀及十方各恒沙等諸佛、同心選擇念佛一行、餘行不爾、故知三經共選念佛以為宗致耳計也、夫速欲離生死、二種勝法中、且闍聖道門、選入淨土門、欲入淨土門、正雜二行之中、且拋諸雜行、選應歸正行、欲修於正行、正助二業中、猶傍於助業、選應專正定、正定之業者、即是稱佛名、稱名必得生、依佛本願故。

(全下廿三以下)

畧述眞宗教史前編終

明治三十五年四月十五日印刷
明治三十五年四月二十日發行

畧述眞宗教史
定價金七拾錢

文文文文文文文文文
版權所有
文文文文文文文文文

著者 前田 慧雲

著者 花田 凌雲

發行者 清水 金右衛門

東京市本郷四丁目五番地

印刷者 島 連太郎

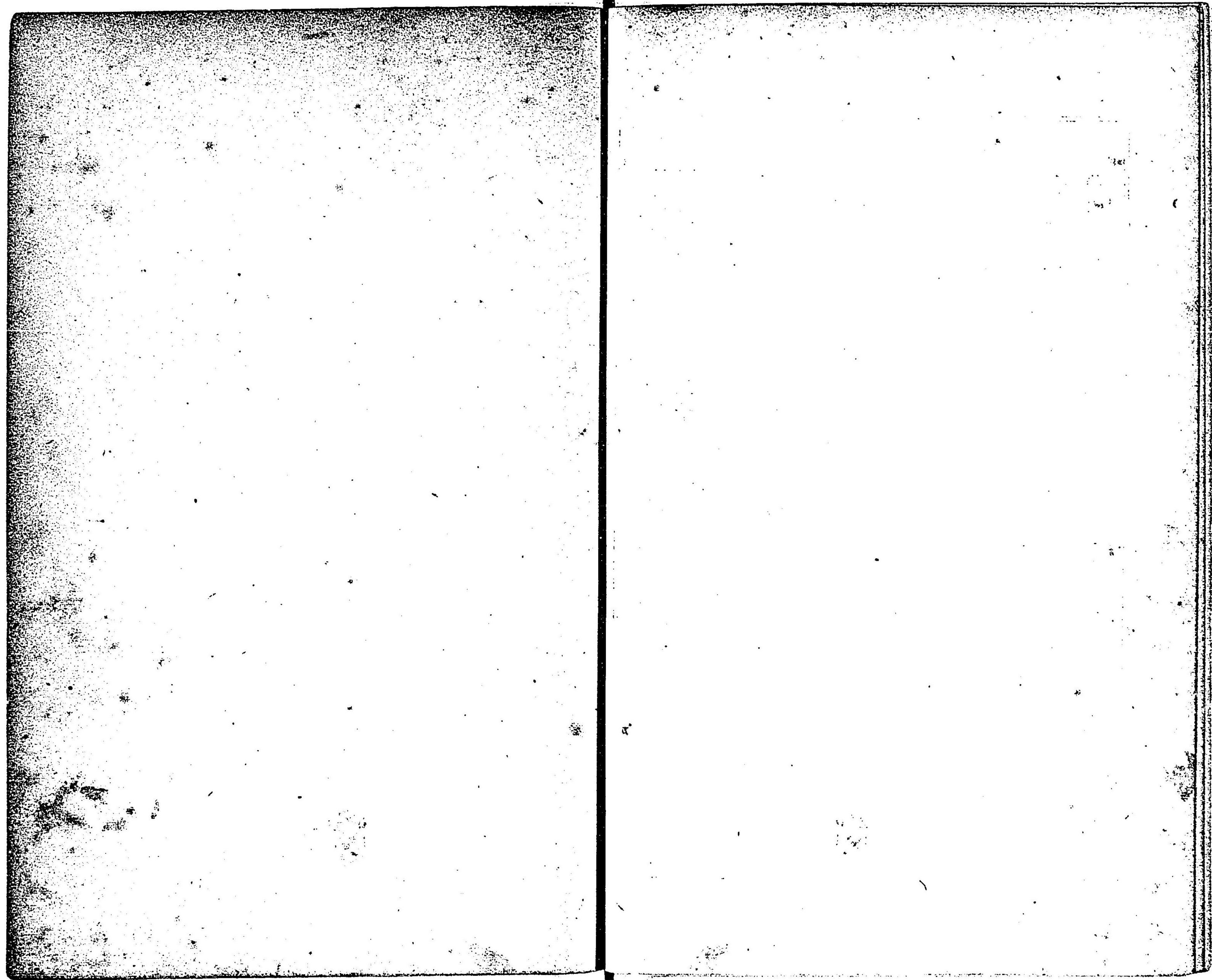
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三 秀 舍

同所 (電話二〇七九)

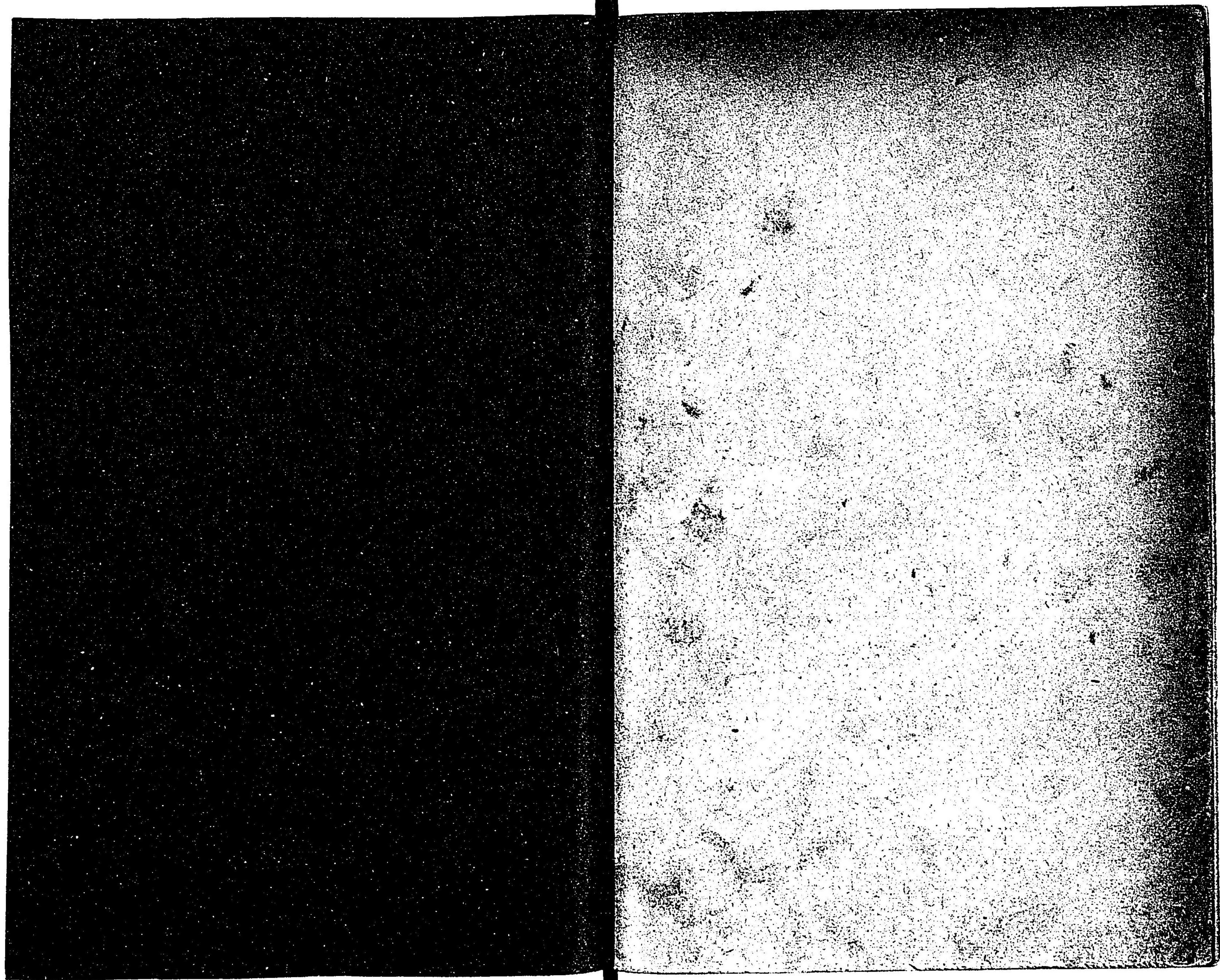
發行所 東京市本郷四丁目五番地 文 明 堂

特約賣捌所 京都市油小路御前通上ル 興 教 書 院

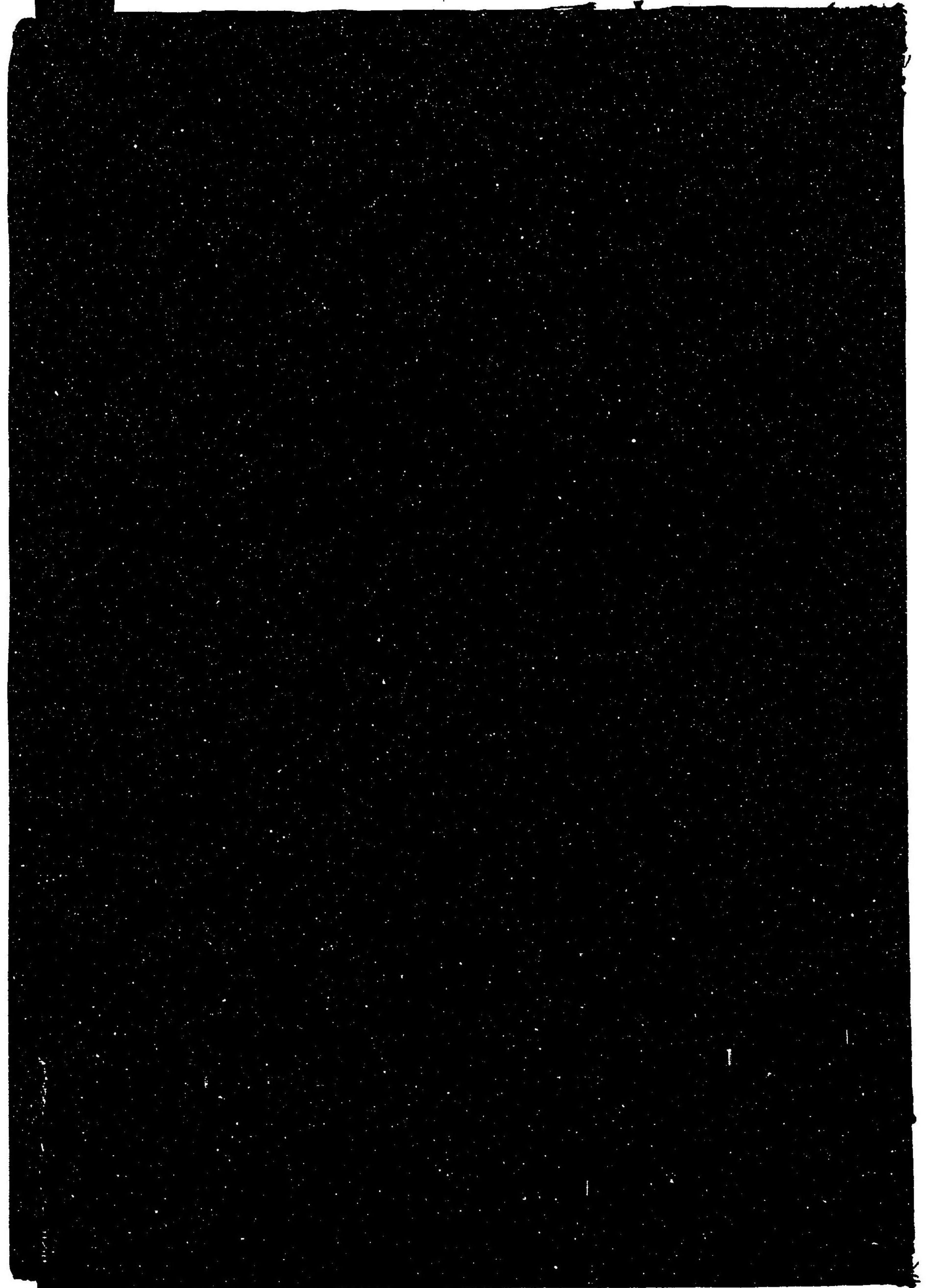


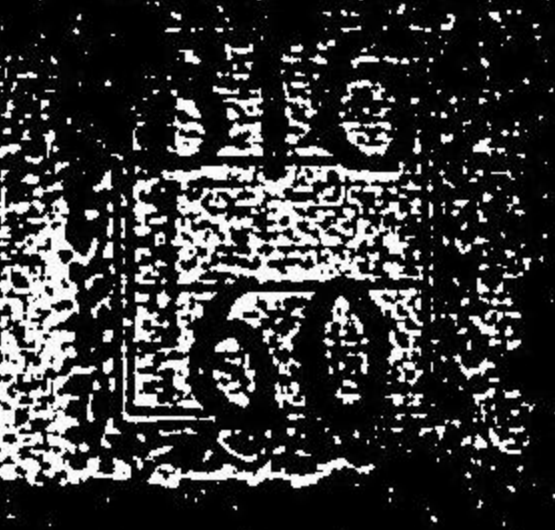
316

60



316
60





019230-000-2

316-60

略述真宗教史

前田 慧雲 / 著

M35.4

ABF-2822



